

1 自分を高める
 (5) 自分の良い所をのびこ

P.46~53
 1-(5)

自分の特徴に気づき、よい所を伸ばす。

1 この内容項目のページの特徴

個性の伸長とは、自分のよさを生かすことであり、自分らしさを発揮しながら調和のとれた自己を形成していくことである。自分の特徴とは、他の人と比べて目立つ所であり、長所だけでなく、短所も含むものである。そこで、四十六・四十七ページでは、自分の「良い所はどこだろう」「気になる所はどこだろう」と問い掛けることで、自分の特徴に気付かせる構成になっている。また、四十八・四十九ページでは、人生の先輩や伝記の主人公から個性を生かした生き方のヒントを学べるようにしている。これらのページを通して、様々な人の生き方を知り、自分の個性について考え、自分らしく生きようとする態度を育てていくことができる。

2 活用のポイント

中学年の段階で、自分の特徴に気付くとは、自分の長所や短所などに気付くことである。そのために、自分の個性を考えるだけでなく、様々な人の個性に児童が触れる機会を多くもつことで、自分の特徴に気付くことができるようにする。また、友達との関わりの中で、互いに認め合う場を設け、自分のよさを自覚して、よい所を伸ばそうとする意欲を高めていくことが大切である。

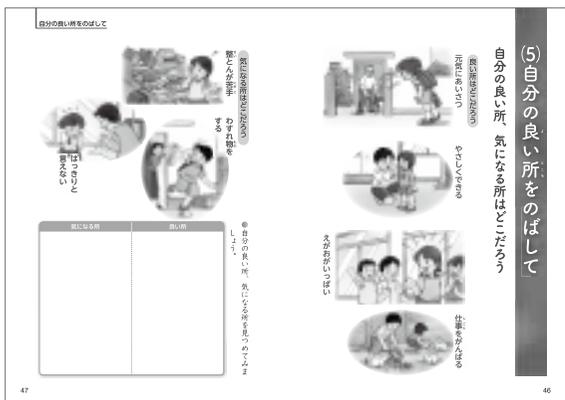
3 活用場面例

道徳の時間

自分のよさを伸ばそうとする意識が高まるように、自分のよい所、気になる所を振り返る際に四十六・四十七ページを活用することができる。また、読み物資料を読んだ話し合った後に、自分の特徴を見直す際に五十三ページを活用できる。

事例

- ① 四十六・四十七ページを参考に自分のよい所、気になる所について話し合う。
- ② 読み物資料「うれしく思えた日から」を読んで話し合う。
- ③ 自分自身の個性について話し合う。
- ④ 五十三ページを活用して、自分のよい所をどのように伸ばしていくかに



P.46~47

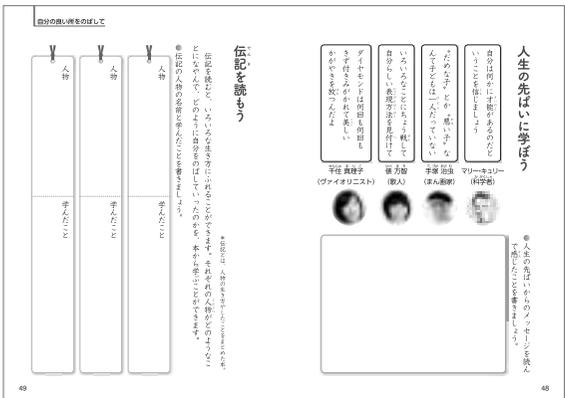
ついて話し合う。

国語科

国語科の内容「C 読むこと」の「(1)カ 目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。」の指導に当たって、四十八・四十九ページを紹介して、個性を生かした生き方をしている人生の先輩について知り、伝記を読む意欲を高める。そして、伝記を読んで、自分の個性をどのようにして伸ばしたのかなど心に残った所を紹介し合い、人物の生き方を読み取るようにする。

事例

- ① 伝記を読んで、その人物がどのような自分を見つけていたのか、学んだことを四十九ページに書く。
- ② 学んだことを発表し、伝記の人物を紹介する。
- ③ 互いの発表について質問し合い、人物の生き方について考えるようにする。



P.48~49

家庭との連携

四十七ページに児童が書いた自分のよい所や気になる所を見ながら、家の人と一緒によい所や気になる所について話し合う。

身近な人から、よい所を認めてもらったり、気になる所について言ってもらったりすることで、客観的に自分の特徴に気付いて、自分のよさを大切に、よい所を一層伸ばしていこうとする態度を育てていくようにしたい。

日常生活

自分の特徴は、他の人から日常生活でほめられたり、認められたりすることで気付くものである。友達や地域の人など多くの人と関わる機会を設けて、四十六から四十八ページを活用して自分自身のことを振り返り、自分のよさに気付けるようにしていきたい。



1 資料の特性

児童にとって、共感しやすい主人公を登場させることで、「自分もそう思う」「自分もそうなれたらいいな」という思いがもてる資料である。
個性の伸長を図るためには、日常生活の中で、積極的に自分のよさを伸ばそうと努めることが大切である。よい所を伸ばそうと努力していけば、その効果は他にも波及していくという点にも着目させるようにしたい。

2 指導上の留意点

自分の特徴に気付くとは、長所だけでなく短所も含めて見いだすことである。
中学年では、短所や不得手なものを努力によって望ましい方向へ改めることも大切だが、まずは自分のよい所に気付き、自分の個性を伸ばしていこうとする態度を育てていきたい。
また、児童の個性をよく理解している家の人から、よい所を伸ばしていこうとする気持ちを励ましてもらうことも効果的であり、本資料を活用する中で、家庭との連携を図るようにしていきたい。

- ・ 苦手なこともできるようになってうれしい。
- ・ もっともっと自分のよい所を伸ばしたい。
- ⑤ 五十三ページに、自分のよい所をどのようにして伸ばしていきたいかを書く。
 - ・ 毎日、少しでも練習する。
 - ・ どのようなときでも、頑張る気持ちを忘れないように心掛けたい。

◎ 継続的な取組・家庭との連携

中学年の児童にとって、自分のよさをすくに答えるのは難しい面がある。自分のよさに気付くには、友達や家族から認められたり、ほめられたりする体験を多くもつことが効果的であり、友達、家族、教師などにより所を見付けてもらうことで、より自分を好きになり、個性を大切にしていけることができるようになっていく。

例えば、「うれしく思えた日から」の学習の後に、帰りの会などで「友達のよい所探し」を行い、継続的に友達からよさを見付けてもらう活動を行ったり、五十三ページに書いたことを家族に見せて、学習したことや自分が思ったことを話し、意見を書き込んでもらったりする。そうしたことを通して、自分のよさに気付き、よい所を伸ばしていこうとする意欲を高めていくようにしたい。

3 展開例

【ねらい】

自分のよさに気付き、自分のよい所を伸ばそうとする態度を育てる。

事例①

「ぼく」の思いを通して、よい所を伸ばそうとすることについて考える展開

【主な学習】

- ① 以前の「ぼく」は、自分のことをどのよう思っていたか。
 - ・ いい所なんて一つもない。
 - ・ 目立たない自分が嫌になる。
- ② ソフトボール投げが三十メートルを越えて、みんなが声を掛けてくれたとき、「ぼく」は、どのような気持ちだったか。
 - ・ みんなが認めてくれて、とてもうれしい。
 - ・ 自分にもこんないい所があったんだ。
- ③ 野球の練習を続けた一年間に、「ぼく」が友達や家族の言葉を思い出したのはどのようときか。また、そのとき、どのようなことを思ったか。
 - ・ 練習がづらいとき。思うように体が動かないとき。
 - ・ 自分には誰にも負けない、いい肩がある。このままじゃない。もっともっと頑張りたい。
- ④ よい所がたくさん伸びてきた「ぼく」は、今、どのような気持ちでいるだろうか。
 - ・ よい所を伸ばそうと努力していたら、いつの間にか

事例②

よさを伸ばした「ぼく」を通して、自分のよい所を考える展開

【主な学習】

- ① 自分には、よい所があると思うか。
 - ・ 分らない。
 - ・ 人からは、字が上手と言われる。
- ② 「いい所なんて一つもない。」と思っていた「ぼく」が、「もう一年前のぼくじゃない。」と言えるぐらい変わったのは、どのような考えからか。
 - ・ 「いいかたしてるね。」とほめられたから。
 - ・ 自分のよい所に気付いて自信をもったから。
 - ・ 自分のよい所を伸ばしていこうと前向きな気持ちをもったから。
- ③ よい所を伸ばそうとして頑張っている「ぼく」のことをどのように思うか。
 - ・ 最初とは全然違う。生き生きしていると思う。
 - ・ こんなに変わるなんてすごい。「いいかたしてるね。」の言葉は、おまじないの言葉のように僕のことを変えた。よい所に気付くことは、すごいことだ。
- ④ 自分や友達のよい所は、どのような所か。
 - ・ ○○さんのよい所は、誰にでも優しくしてくれる所。
 - ・ 私のよい所は、マラソンを頑張っている所。

2 人と関わって

(1) だれに対しても真心をもって

P.56~61

2-(1)

礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。

1 この内容項目のページの特徴

挨拶や言葉遣い、振る舞いなどに焦点を当てながら、その振る舞いに込められた相手を大切にしている気持ちについて考えることができるような構成になっている。五十六から五十八ページは、児童が日常生活を振り返って、礼儀の形として知っていることなどを書けるようになっており、それらがどのような気持ちから形となって表れたのかを考えられるように工夫されている。五十九ページのチェックシートでは、児童が自分の課題に就いて、実際に礼儀をわきまえた行動ができたかどうかを確認できるようにしている。また、六十・六十一ページは、茶道や華道の作法や型を例に挙げ、日本の伝統や文化として受け継がれているものにも、相手を大切に思う気持ちが含まれていることに気付くことができる。

2 活用のポイント

中学年の段階では、相手の気持ちを自分に置き換えて自らの行動を考えられるようになってくる。相手の気持ちを自分に置き換えて考え、真心を込めて対応をするためにも礼儀が大切であることを指導するようにしたい。また、児童は、気の合う友達同士だけで仲間集団をつくりがちであるため、誰に対しても真心をもって接する態度を育てることも重要である。

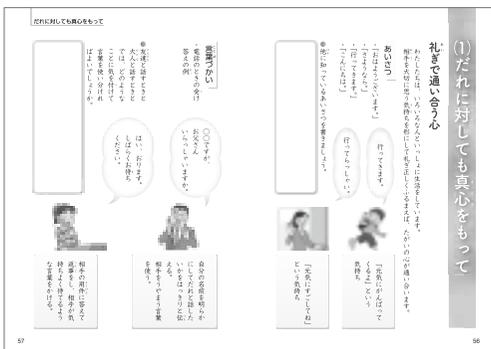
3 活用場面例

道徳の時間

五十六から五十九ページを活用して、相手を大切に思う気持ちを込めた挨拶や言葉遣い、振る舞い方について考え、誰に対しても真心をもって接する態度を育てるようにする。

事例

- ① 五十六から五十八ページを読んで、心を込めた挨拶や言葉遣い、振る舞いについて話し合う。
- ② 読み物資料を読んで話し合う。
- ③ 五十九ページに、自分が心掛けてみようと思う礼儀を書く。



P.56~57

総合的な学習の時間

今の時代にも受け継がれている茶道や華道は、相手を尊重するというおもてなしの心が型となって表れた我が国の伝統的な文化である。このような日本の伝統や文化を題材にして学習する際に、日本の伝統や文化への関心を高めるきっかけとして六十・六十一ページを活用することができる。

なお、総合的な学習の時間の学習に当たっては、探究的な学習となるよう十分に時間を確保するとともに、日常生活や社会との関わりを重視するようにしたい。

事例

- ① 六十・六十一ページを読んで、茶道や華道の作法や型の中には、相手を大切に思う気持ちが込められていることに気付くようにする。
- ② 茶道や華道などを体験することにより、その作法などから相手を尊重しようとする心を学ぶ。
- ③ 日本の伝統や文化について、「○○道」と付く言葉を手掛かりとして、それぞれの「道」には、相手を尊重するためにどのような作法があるのか調べたいことを決めて、本で調べたり聞き取りをしたりする。
- ④ 調べたことや調べて考えたこと、思ったことを整理してまとめ、家庭や地域の人を招いて発表する。

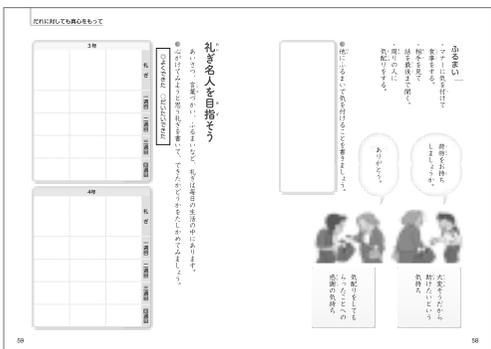
特別活動（学級活動）

学級活動の内容「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「イ 基本的な生活習慣の形成」の指導に当たって、五十六から五十八ページを活用し、自分の生活を振り返って、基本的な生活習慣を身に付けていこ

うとする態度を養うことができる。

事例

- ① 五十六ページを読んで、知っている挨拶を書き込み、発表し合う。また、その挨拶に込められている気持ちについて話し合い、声に出して挨拶を試みる。
- ② 五十七ページを読んで、電話での会話から、相手の立場に立った言葉遣いについて話し合う。
- ③ 五十八ページを読んで、振る舞いとはそのようなものかについて話し合い、振る舞いで気を付けることについて書き込む。
- ④ 五十九ページに、自分が心掛けてみようと思う礼儀を書いて、できたらどうかチェックしていくようにする。



P.58~59

日常生活

挨拶や言葉遣い、振る舞いなどは、日常生活で繰り返して取り組む中で、習慣として定着していくものである。一定の期間を決めて、五十九ページのチェックシートを活用し、自己評価をすることで、児童が主体的に礼儀作法を身に付けていくことができるようにする。

2人と関わって

(2) 相手を思いやり親切に

P.62~69

2-(2)

相手のことを思いやり、進んで親切にする。

1 この内容項目のページの特徴

人は、困っている人や悲しんでいる人を見ると、相手を心配したり助けたりしようとする気持ちが湧いてくる。また喜びを味わうと、その喜びを他の人と分かち合おうとする心が働く。こうした相手のことを考える心の通い合いによって、人と人との関係は成り立っている。

六十二・六十三ページでは、思いやりの心とは、どのような心なのかを考えたり、思いやりの心を表せたときのすがすがしさを味わったりすることができる。

また、六十四・六十五ページでは、様々な文学作品に表れた思いやりの心に触れて、思いやりの心の温かさを感じ、人に親切にしようとする態度を育んでいくことができる。

2 活用のポイント

中学年の段階では、相手が困っていることや大変な思いをしていることなどを想像して、相手のことを考えて親切な行為を自ら進んで行うことができるように、六十二・六十三ページを活用して、その時々人の気持ちを考えさせるようにしたい。

また、六十四・六十五ページの活用に当たっては、国語科の学習や読書活動との関連を図る工夫なども行い

たい。

3 活用場面例

道徳の時間

六十二・六十三ページのイラストを活用するなどして、相手の気持ちを考え、思いやりの心を表そうとする態度を育んでいく。

事例

① 六十二・六十三ページのイラストを見て、相手の気持ちを想像し、どのような思いなのか発表し合う。

② 読み物資料「心と心のあく手」を読んで話し合う。

③ 思いやりの心が表せたときのことを六十三ページに書いて発表する。



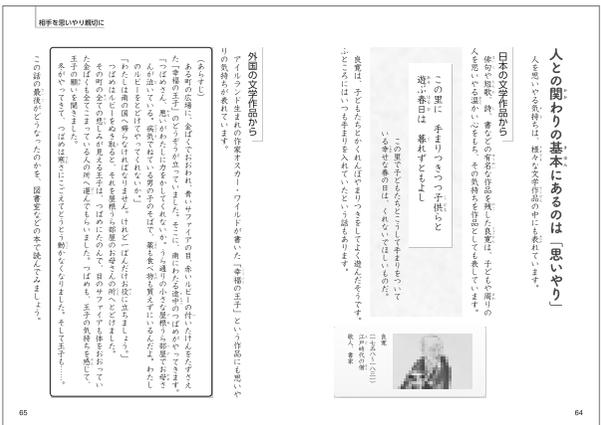
P.62~63

国語科

文学的な文章を読んだり、短歌や俳句に触れたりする際に、登場人物の思いや行動に着目させるために、六十四・六十五ページを活用して、「人との関わり」の基本にある『思いやり』の言葉を意識させる。

事例

- ① 短歌や俳句の学習の際に、六十四ページの良寛の作品を音読し、そこに込められた子供への思いを想像する。
- ② 良寛の他にも、思いやりが感じられる作品を探す。
- ③ 「思いやり」をテーマにした詩や物語を創作する。



P.64~65

家庭との連携

道徳の授業を公開した後などに、六十二・六十三ページを活用して、家庭で「思いやりの心」について話し合う。家庭での話し合いを基にして、日常生活の中でも思いやりのある行動を実践していこうとする意欲を高める。

日常生活

帰りの会などにおいて、一日の生活を振り返るときに、六十二・六十三ページのイラストを参考にしながら、人の気持ちを思いやった行動ができたかどうかを考える。また、日常生活において、思いやりのある行動に触れたときに、その行動を葉の形のカードに書いて貼る「思いやりの木」などをつくって、思いやりのある行動を認め合うこともできる。その際、六十二・六十三ページを参考に、思いやりのある親切な行動を振り返るようにする。

【思いやりの木(例)】



1 資料の特性

主人公の「ぼく」は、学校から帰る途中で、大きな荷物をもったおばあさんに出会う。「ぼく」は、おばあさんに「荷物、持ちます。」と声を掛けるが、おばあさんに断られてしまう。その話を母にすると、母は、おばあさんは歩く練習をして、やっとあそこまで回復してきたらしいと説明してくれた。数日後、またあのおばあさんに会ったとき、「ぼく」は、声を掛けようかどうかを考えたが、そつと後ろをついて行くことにした。家にたどり着いたおばあさんの笑顔を見て、「ぼく」は「心と心のあく手」をしたような気がしたという内容である。

思いやりとは、相手の状況や心情を理解するなどして、相手の立場に立って考えることが大切であることを学ぶことのできる資料である。

2 指導上の留意点

本資料の活用にあたっては、おばあさんに声を掛けようかと迷う「ぼく」に共感させ、自分だったらどのようなかをするか、また、なぜそのようにするのかについて考えさせるようにしたい。

そして、見守るといふ行動を選択した「ぼく」の心の中を考えさせ、相手を思いやる行動をするためには、相手の思いを想像して相手の立場に立って考えることが大切だということを考えさせるようにしたい。

3 展開例

【ねらい】

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする態度を養う。

事例①

「ぼく」の思いを通して、親切について考える展開

【主な学習】

- ①目の前にいる苦しそうなおばあさんを見て、「ぼく」はどのようなことを考えたか。
 - ・荷物が重くて苦しそうだ。荷物を持ってあげようかな。
 - ・お母さんとの約束もあるし、急いで帰らなければならぬ。
 - ・声を掛けるのは恥ずかしいな。
 - ・もしも断られたら嫌だな。
- ②おばあさんに「家まですぐだからいいですよ。」と言われたとき、「ぼく」はどのようなことを思ったか。
 - ・せつかく言ったのにな。どうして断るのかな。
 - ・声を掛けなければよかったかな。
- ③数日後、再び一生懸命坂を上っているおばあさんに出会った「ぼく」は、どのようなことを考えたか。
 - ・おばあさん、頑張っているんだな。
 - ・おばあさんがしてほしいと思っっていることは、何かな。
 - ・見守ることも親切になる。応援でもいいんだな。
 - ・おばあさんは、随分と歩けるようになったな。
- ④長い坂道を上り切ったおばあさんの様子を見た「ぼく」

は、どのようなことを思ったか。

- ・おばあさん、頑張ったね。最後まで自分の力で歩けたね。
 - ・つらかっただろうけれど、自分の力で歩けるようになりたかったんだね。
 - ・おばあさんは、娘さんの言葉がうれしかったんだね。
- ⑤相手のことを思いやり、親切にしたことはあるか。それは、どのようなことか。また、それは、どのような気持ちから行ったのか。
- ・隣の席の友達がこぼした牛乳と一緒に拭いてあげた。
 - ・一人で拭くのは大変だろうと思ったから。
 - ・お年寄りの人が電車に乗ってきたので、席を譲った。
- 立っているのがつらそうに見えたから。

事例②

本場の親切について考える展開

【主な学習】

- ①親切とは、どのような行動だと思うか。
 - ・相手に優しくすること。
 - ・困っているときに助けてあげること。
- ②数日後、再び、一生懸命坂を上っているおばあさんに出会う場面で、自分だったらこの後、どうすると思うか。また、なぜ、そうするか。
 - ・声を掛けて、一緒に家まで送っていくと思う。おばあさんのことが心配だから。
 - ・声は掛けないと思う。おばあさんは歩く練習をしているから、そつとおこうと思う。声を掛けても、

◎ 「情報モラル」や「つづめ」の指導への発展

相手と直接向かい合うことがないインターネットを介してのトラブルや、いじめの問題は、相手の立場や心情を思いやる気持ちの欠如や考え方の相違、一方的な思い込みなどが発端となっており、場合が多い。

本内容項目（六十二から六十九）のページとともに情報モラル（一七〇から一七三）のページを活用して、相手の立場に立って相手を思いやることの大切さを学ぶようにしたい。

2人と関わって

(3) 友達とたがいに理解し合って

P.70~79

2-(3)

友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。

1 この内容項目のページの特徴

本内容項目は、学習指導要領で示されている道徳の指導内容の重点の一つである身近な人々と協力し助け合う態度を身に付けることと関連の深い項目である。

七十ページには、これまでの友達との関わりを想起し、友達がいてよかったと思ったことを振り返る内容がある。次に、「助」や「友」などの漢字から、友達づくりの秘訣を考えることによって、これまでの友達との関係を振り返り、見直す内容へと続いていく。

また、七十二ページは、友達のよい所を記入する内容、七十三ページは、友達の大切さを標語に表す内容になっている。

さらに、七十四・七十五ページには、本当の友達とは何かについて一層深く考えることのできる内容や、友達のよさや温かさなどを感じる事ができるよう友達に関する二つの歌詞を掲載している。

このように、本内容項目のページは、友情のすばらしさについて、多様な視点で考えることのできる構成になっている。

2 活用のポイント

中学年の児童は、気の合う友達同士で仲間をつくり、友達と集団で活動することがこれまで以上に盛んになる

と思うのは、どのようなときか話し合う。

- ② 読み物資料「同じ仲間だから」を読んで話し合う。
- ③ 友達のよい所を見付け、七十二ページに記入し、互いに伝え合う。
- ④ 心を込めて「すてきな友達」を歌う。

音楽科

七十五ページの歌詞に書かれた事柄を自分の体験として振り返るような問い掛けを行う。友達に対する思いを音楽表現にどのようにつなげるのかを考えさせた上で、表現を工夫し、友達に対する思いをもって歌うようにする。

特別活動（学級活動）

学級活動の内容「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「望ましい人間関係の形成」の指導に当たって、よりよい友達関係を築くために、友達と仲よくすることや、互いのよさを認め合うことなどの指導の際に七十一・七十三ページを活用することができる。

事例①

①七十一ページの漢字の他に、友達づくりの秘訣になる



P.74~75

一方で、自分の利害に基づいて衝突することも見られるようになる。このような特性から、健康的な仲間集団を積極的に育成していくことが大切であり、友達のことを互いによく理解し、信頼し、助け合うことの大切さに気付かせる必要がある。

特に、いじめ防止への取組としても、互いのよさを発見し合ったり、違いを認め合ったりすることを大切にできるようにしたい。

3 活用場面例
道徳の時間

授業の導入の場面で、七十ページを活用することができ。また、友達のよい所を見付けたり、学習のまとめを行ったりする際に、七十二・七十五ページを活用することができる。

事例

①七十ページを読んで、友達がいてよかった



P.70~71

漢字を考え、発表し合う。

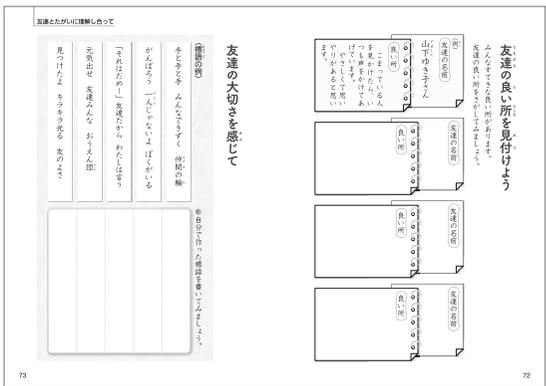
- ② 七十三ページ上段の標語を参考にして、よりよい友達関係を築くための標語を考え、発表し合う。
- ③ 出来上がった全ての標語を学級に掲示し、その標語の言葉を実践していくようにする。

事例②

- ① 七十四ページの「友情って何だろう」を基に、友達や友情について自分の考えを書き、発表し合う。
- ② 発表し合った友達や友情についての言葉を基にして、自分は、どのようなことを頑張りたいのかを決め、実行していくようにする。

日常生活

七十五ページの友達の歌を日常的に歌うことを通して、友達を大切に思う気持ちを深めていくことができる。



P.72~73

1 資料の特性

とも子たちの学年は、運動会の学級対抗種目で「台風の目」を行うことになった。練習の日の朝、とも子が教室に入ると運動が苦手な光夫のことが話題になっていた。そのとき、教室に入ってきた光夫の指に包帯が巻いてあるのを見て、「台風の目」で同じグループのひろしは、光夫に体育を休んだ方がいいと主張する。そんなひろしの言葉を聞いて、とも子は返事に困ってしまったが、転校した同級生よし子の手紙を思い出し、「光夫さんを外して勝とうとするなんて、まちがっていると思うの。」と厳しく、はっきりと言う。このことをきっかけに、三人が心一つにして練習に励むという内容である。

友達の身になって考えることの大切さや、考えが違っていても友達のためだと思ふことをはっきりと伝えることで相手にもその思いが伝わり、信頼や友情が育まれることを深く考えさせるようにしたい。

2 指導上の留意点

本資料の活用においては、とも子の思いを中心に考えさせる展開の他、とも子、ひろし、光夫の三人の思いを比較させながら考えを深める展開も考えられる。自己中心的な思いから、仲間外れにしようなど、いじめの問題についても考えることができる。児童の実態等に応じた多様な展開を工夫したい。

- ④とも子は、「台風の目」を光夫、ひろしと一緒にどのようないでやっているか。
- ・光夫さんも楽しそう。仲間外れにしないでよかった。
- ・光夫さんを外していたら、光夫さんは、きっと悲しい気持ちになっていたらうな。やっぱり仲よくした方がみんな楽しい。

事例②

ひろし、とも子、光夫の三人の思いを通して、友達を大切にすることについて考える展開

【主な学習】

- ①ひろしとも子は、朝の教室でどのようなことを考えていたのか。
- ・(ひろし) 光夫君がいると「台風の目」で勝てない。体育を休んでくれれば勝てるかもしれない。
- ・(とも子) そのくらいのが良かったらできるはずだ。休ませるなんていけない。でも、光夫さんが入れば、負けてしまう。どうすればいいのだろう。
- ②とも子がひろしに、「光夫さんを外して勝とうとするなんて、まちがっていると思うの。」と、厳しく、はっきりと言えたのはどのような思いからか。
- ・よし子からの手紙を読んで、仲間外れにされた人のつらさを考えたから。
- ・光夫さんも二組の大切な仲間だという思い。
- ③三人は、どのような気持ちで「台風の目」に取り組んでいるのだろうか。
- ・(ひろし) 光夫君を無理矢理休ませたりすると、きつ

3 展開例

【ねらい】

友達の身になって考え、互いに理解し合い、友達を大切にしようとする態度を育てる。

事例①

とも子の思いを通して、友達を大切にすることについて考える展開

【主な学習】

- ①「ぼくたちのグループには、光夫君がいるんだものな。」と、ひろしに不満そうに言われたとき、とも子は、どのようなことを思ったか。
- ・ひろしさんが言うように、光夫さんがいると二組は勝てないのかな。
- ・光夫さんだって頑張っているのになんだかわいそう。
- ②「そうかい。でも、休んだ方がいいんじゃないか。ともちゃん、どう思う。」と言われたとき、とも子は、どのようなことを思ったか。
- ・光夫さんが大丈夫だと言っているのに、無理矢理休ませようとするのはいけない。
- ・光夫さんが休めば勝てるかもしれない。
- ③転校したよし子からの手紙を読んだときのことを思い出し、はっとしたとも子はどのようなことを考えていたか。
- ・言葉が少し違うだけで仲間外れにするなんてひどい。
- ・よし子さんは、つらい思いをしているんだろうな。
- ・私たちも、光夫さんに同じことをしているのかもしれない。

二の視点 重点ページ

やさし合い 助け合い

「合う」の力で 心をしなげよう

P.80~81

1 ページの特徴

仲間と力を合わせれば、一人でできないこともやり遂げられる。それほど仲間の支え合いや助け合いは大きな力であるということを考えることのできるページである。

「二十七人で一つのリレーをしていた。」の言葉は、児童が学級の仲間と心と心をつないで「合い」の力を発揮すれば、困難なこともやり遂げることができるのだということを感じ取らせてくれる。

2 活用事例

■特別活動(学級活動)

年度始めの学級の目標を決める活動や、運動会などの行事に取り組む活動で、学級の仲間意識を高める際に、このページを活用することができる。

2 人と関わって

(4) そんけいと感謝の気持ちをもって

P.82~87

2-(4)

生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。

ようにすることが大切である。

3 活用場面例

道徳の時間

八十二・八十三ページは、学校だけでなく家庭や地域でどのような人に支えられているか、自分の生活を振り返って考える際に活用することができる。また、八十六・八十七ページの詩「朝がくると」を活用し、八十七ページに記入することで、他者への感謝の気持ちを一層深めることができる。

事例①

① 「ありがとう」を一日に何回言っていると思うか話し合う。

② 八十二・八十三ページの写真を見て、私たちはどのような人たちに支えられているか話し合う。



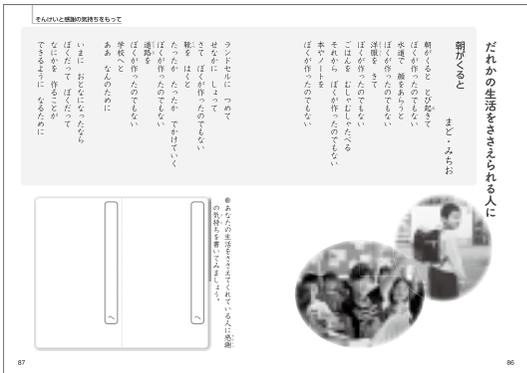
P.82~83

1 この内容項目のページの特徴
本内容項目については、低学年の段階での感謝に加えて、中学年では、尊敬の念が求められる。直接自分の世話をしてくれる人だけでなく、自分の生活を支えている多くの人々の存在に気付かせ、支えられていることを自覚するとともに、高齢者の生き方に学ぶことが多くあることにも気付かせることが大切である。
そのために、八十二・八十三ページでは、生活を支えてくれている人たちに焦点を当て、自分たちの生活が多くの人々に支えられていることを自覚できるようにする。また、八十四・八十五ページでは、今の生活を築き、支えてきた高齢者の努力などに触れて、感謝と尊敬の気持ちをもてるようにしている。さらに、八十六・八十七ページの「朝がくると」の詩を読むことで、支えられている人から、支える人になろうとする意欲を高められるような構成になっている。

2 活用のポイント

中学年の段階では、日頃世話になっている人々から、日々の生活を支えてくれている人に感謝の対象が広がる。そこで、自分たちの生活を支えてくれている人々や、長く自分たちの生活を支えてくれた高齢者に対する理解を深め、尊敬と感謝の念をもって接することができる。

- ③ 詩「朝がくると」を読んで、自分の生活を支えてくれている人を考えて発表する。
- ④ 生活を支えてくれている人への感謝の気持ちを八十七ページに書いて発表する。



P.86~87

事例②

- ① 日頃世話になっている人に感謝の気持ちをもった出来事やそのときの思いを発表し合う。
- ② 八十四・八十五ページの「今のくらしをつくったお年よりたち」を読んで、高齢者に対してどのようなことを思うか話し合う。
- ③ 地域の高齢者をゲストティーチャーとして招き、自分たちの今の暮らしを築いてくれたことについての話を聞く。どのような思いで仕事をしてきたかなど質問をする。

家庭や地域との連携

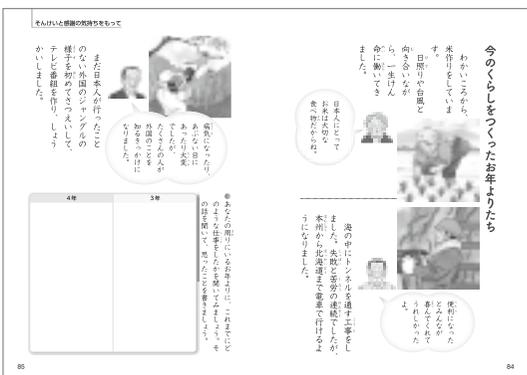
学校・学級通信等で、家庭や地域に本内容項目についての学習状況を伝えるとともに、仕事について高齢者にインタビューすることを依頼する。

八十四・八十五ページを活用して、周りにはいる高齢者へのインタビューを行い、高齢者との関わりを深め、今の暮らしを支えてくれたことへの感謝の気持ちをもたせるようにしたい。

また、学校行事や総合的な学習の時間などで地域の人に世話になった後に、帰りの会などで八十三ページを用いて、支えられていると思った出来事などを書くこともできる。

日常生活

感謝の気持ちは、日常生活において人と関わっていく中で生じるものである。八十二・八十三ページを定期的に活用し、世話になっている人に対して、感謝の気持ちを言動で伝えられるようにしていきたい。



P.84~85